◎小学生の部

その他の良い作品

思い出の一枚

新郷第一小学校　四年
小川　恭佳

「ほら、これを見てごらん。」
おばあちゃんが見せてくれた一枚の写真
わたしと同じ年のお母さん
「夏休みに羽生の町について調べていて、
その時にとった写真だよ。後ろに写っている
のが、川また関所あとの石ひだよ。」
「わたしも行ってみたいな。」
何だかわくわくした
上新ごうの宿通りにあった松並木
その名前は、かんべえ松
一六二八年、今からやく四百年以上前に
とく川家光が日光社参りの時に
かんべえに命じて植えた松である
そこを通りすぎると、急な坂道を登る
「あった。」
写真で見た場所、川また関所あと
ここは、江戸時代につくられ
鉄ぽうの持ちこみを取りしまる場所
石ひは、少しわれている
でも何百年もの間、雨や風にさらされても
この場所で守られつづけている
お母さんと同じ場所でとる一枚の写真
少し不思議な気分
タイムスリップしたみたい
土手はまるで緑のじゅうたん
山は広がり、川は静かに流れる
いつまでも羽生のふるさと
わたしのふるさとを守りたい
美しい風景を守りつづけて…

ブーゲンビリア

新郷第二小学校　六年
川嶌　美穂

おじいちゃんの家の前にさいているブーゲンビリアは
暖かい地方に咲く花だ。
「もうこれ一本で最後だから買ってくれませんか。」
小さい鉢に入ったブーゲンビリアを売りに来た行商のおばあちゃんにそう言われ、同じ商売人として買うことにした
これがブーゲンビリアとの出会いだそうだ
年月がたち大きくなったブーゲンビリアを店の前に植えた
近所の方々やお店にくるお客さんたちに楽しんでもらいたいというおじいちゃんの思いからだ
おじいちゃんは、冬が近づくと、寒さに弱いブーゲンビリアの枝を切り、幹と枝だけにしたものを大きな鉢に植えかえ、春がくるまで家の中で大切に育てる
霜がおりなくなったころ、また鉢から出してお店の前に植える
おじいちゃんはこのくり返しを三十年以上もやっている
おじいちゃんとおばあちゃんに大切に大切に育てられているお花って
幸せだなと思う
おじいちゃんの庭にはいつもきれいな花がたくさん咲いている
仕事でつかれていながらも、おばあちゃんといっしょに一つ一つのお花を大切にし、庭いっぱいに咲かせては楽しんでいる
そんな花たちに心をなごませてもらっているわたしも
幸せだなと思う
わたしはそんなやさしいおじいちゃんとおばあちゃんが大好きだ
ブーゲンビリア
これからもきれいな花をさかせてね

しょうぎ

新郷第二小学校　一年
小森　陸生

おじいちゃんから
しょうぎをおそわった
むずかしそうだとおもったけど
こまのうごきをおぼえたら
たのしくって
まい日まい日しょうぎをしている

ねらっているこまをとれたとき
「おおて」といったとき
ぼくはとてもわくわくする
こまをおくときの
「パチン」ておと
かっこよくてだいすきだ

でも
わざもいっぱいおぼえたけど
おじいちゃんにかてない
てかげんしてもらっても
かったのはまだいっかいだけ…

もっともっとしょうぎをして
もっともっとつよくなりたい
つよくなって
おじいちゃんに
「つみ」っていっぱいいいたいな

ゆうがたのおと

羽生南小学校　一年
関根　伶

ゆうがた五じのおんがく。
ぼくのいえの、いぬのぎんがは
このおんがくにあわせて
「わおー、わおー。」って、とおぼえをする
んだ。
ぼくは、そのとおぼえがだいすき。
みてるぼくにきがつくぎんが。
はずかしそうにぼくをみるけど、
ちいさなこえになっても
「わおー、わおー。」
おとといっしょにうたってる。
きっと、ぎんがは、この五じのおんがくを
たのしみにしているんだ。
おにいちゃん、おとうさん、もうすぐ
「ただいまー。」ってかえってくる。
ぼくもぎんがといっしょだよ。
はずかしいから、とおぼえはしないけど、
こころのなかで、いっしょにうたっている
よ。

ぼくとぎんがのだいすきなおと。
かぞくがそろうあいずのおと。

わくわくドキドキはにゅうとしょかん

井泉小学校　一年
はすみ　ひなの

わたしのだいすきなばしょ
「はにゅうとしょかん」
いくと、わくわくドキドキする。
としょかんにはいると、
むじなもんがパネルのなかからおでむかえ
としょかんには、ほんがいっぱい。
たくさんあるけど、わけてあるからみつけ
やすい。
それでもみつからないときは、パソコンの
でばん。
しらべると、りすがでてきておしえてくれ
る。
わたしは、たくさんのほんをかかえて、か
しだしカウンターへいく。
としょかんのひとがやさしくむかえてくれ
る。
いつもえがおですてきだな。
わたしは、またきたくなる。
２かいでは、おはなしかいもやっている。
きかせやけいたろうさんのおはなしが、す
ごくおもしろくて、みんなわらってた。
としょかんには、しりょうかんもある。
どうぶつがかざられていたり、むしがかざ
られていたりしていて、おもしろい。
いろぬりもたのしかった。
むじなものおおきなもけいもあって、びっ
くりした。
わたしのだいすきなとしょかん
わたしのかぞくもだいすき。
わたしのともだちもだいすき。
このすてきなばしょを
もっともっとたくさんのひとに
すきになってもらいたいな。
これからもずっといきたいな
はにゅうとしょかん。

命の重さ

手子林小学校　六年
蓮見　倭士

ぼくの家には四ひきの猫がいる
三番目の猫　名前はこはく
こはくは　とてもおだやかな猫
とても食いしんぼうな猫
とても人のことが好きな猫
とても目のきれいな猫
こはくが病気にかかった
ふっくらしていた体は
少しずつ少しずつ小さくなって
たっぷり食べていたごはんも
少しずつ少しずつ減っていた
でも、
家族のことが好きなのは
ずっと変わらないままだった
いやな病院に毎日連れていかれても
いやな薬を毎日飲まされても
こはくは辛い体を起こして
僕たちに寄りそっていた
助からない病気なのは分かっていた
それでも奇跡を信じた
平成二十八年五月二日
僕たちの祈りは届かなかった
僕たちの帰りを待ってくれた
朝は元気だったのに
心配かけたくなかったのかな
待っていてくれて嬉しくて
最後まで僕たちを想ってくれたのかな
今まで生きてきた中で
きっと一番悲しかった　苦しかった
命の重さを知った　悲しくて悲しくて
でもこはくはそんな僕たちを見て
余計悲しむかな
僕がメソメソしていたら安心できない
姿はなくてもずっとそばにいるよね
ずっとずっと　見守っていてね

まほうの言葉

手子林小学校　四年
濱野　啓介

「いたいっ」
自転車に乗っていて転んだ
ひざから血が出た
ばあちゃんは言った
「だいじゅ」
それを聞いてなんだかいたくなくなった

服をよごした時も
何か失敗した時も
ちょっと具合が悪い時も
ばあちゃんは言う
「だいじゅ」と

そう言われるとぼくは安心する
ばあちゃんの「だいじゅ」には
不思議な力がある

ばあちゃんの「だいじゅ」は
「大じょうぶ」
という意味だ
他にもばあちゃんだけが使う
言葉がある
でも意味は分かるし
なんだかほっとする

ばあちゃんの使う言葉は
羽生の方言の一つだ

方言はじいちゃんやばあちゃんが
使うものだと思っていた
でも気づいたらぼくも
心の中で使っていた

サッカーの試合で
ボールが顔に当たった
泣いてしまった
その時ばあちゃんの顔がうかんだ
ばあちゃんに
「だいじゅ」
と言われた気がして
すぐになみだが止まった
最後までがんばった

ぼくの弟はよく泣く

その時はばあちゃんから受けついだ
不思議な力を
今度はぼくが
使ってみたいと思う

ホタルの光

手子林小学校　三年
吉田　直哉

ほら、そろそろむかえに来るよ
あたりがすっかりくらくなった田んぼの中
に、小さく見えた光
生まれてはじめて見たホタル
まわりがしいんとしずまりかえった
そこにぽつんと光った小さな光

ホタルほぞんの会のおじさんたちが
二十年大事に育ててきた
きれいな土や水がないと生きていけない
えさのたにしもつかまえて
一年中かんきょうをととのえて
大事に育ててきた

ぼくの　お母さんの子どものころには
近所の田んぼにたくさんホタルがいたんだ
って
どうして今はいなくなってしまったのかな
じっと目をこらさないと
見うしなってしまうくらい
小さく弱い光
だけどきれいだった
その光に心がおだやかになる気がした

ひとすじの光の線が
つうっつうっとリズムよく
うかんでは消えていった
ホタルは
おしりの光で会話をしているんだって
どんな話をしているのかな

◎中学生の部

その他の良い作品

「いつかわかるのかな」

南中学校　三年
柿沼　晴奈

私は怒るし泣くし喜ぶし落ち込む
お母さんだって私と同じように怒ったりす
　ると思う
私がいくらわがままでも
私がいくらお母さんを傷つけても
お母さんは何も言わない
次の日にはいつものようにごはんを作って
いつもと変わらない
お母さんは私を嫌いにならないのかな
どんなときも
お母さんは私を愛してくれる
今の私にはわからない
なんでお母さんはこんなに強いんだろう
いつかわかるのかな
私が強くなれたときには
きっと
お母さんをギュッと抱きしめるから

大好きなうどん

西中学校　一年
久保木　さくら

「テンコテンコ、テンコテンコ。」
あ、この音はもしかして
外からはいつもの音
「やった。今日はうどんだ。」
私の好きなおばあちゃんのうどん
毎週土曜日にいくと
夜ご飯の時はだいたいうどん。
でも全くあきない
それを見ておばあちゃんは
私たちにうどんを作ってくれる
でも、それを続けているとたまに
「大変そうだな。」
と、思うことがある
だから
こねて
のばして
切って
一緒に作る
そうしてがんばって作るうどんは
最高においしい。
お店とかで売っているものとは
同じうどんでも
ちがう
手作り感で
あふれている
見た目も
食感も
めんも
これが好きだ
私はこれが好きだ
おばあちゃんのうどんが
好きだ

あたりまえの毎日

東中学校　三年
小久保　未紅

自転車に乗って
風をきる
一直線の通学路
いつもの信号を越えて
いつもすれ違う人と今日も目が合う
季節で変わる田畑の表情を横目に
今日も学校へとたどりつく
いろんな友達とあいさつを交わす
授業で給食が待ち遠しくなるクラスメイト
たくさん遊ぶ昼休み
下校のときの大きなあいさつの声
そしてまた私は
自転車に乗って
風をきる
あたりまえの毎日
聞こえる風の音、仲間の声
一つ一つ心に刻んでいこう
ここがわたしの好きなまち
ここがわたしのふるさとだから

故郷と生きる

東中学校　三年
小竹　夏鈴

茜色に照らされる坂道を
まだ暑い風を切って
勢いよく下っていく
眩しいほどの夕焼けが
黒い列をつくる鳥たちが
一日の終わりを告げている

月明かりの道を
もう涼しい夜風をくぐって
ゆっくりと進んでいく
合唱をする虫たちが
田んぼに映る光が
静まり返った暗闇を
鮮やかにしていく
私の一日が終わる

朝目覚めると
窓からこぼれる日差しが
吹きぬける風が
一日の始まりを告げる

あの鳥は
あの虫は
親子かもしれない
それとも兄弟姉妹か
友達かもしれない

今日も一緒に
広い空に羽ばたいているだろう
楽しく歌を歌っているだろう

私もここで
故郷で
皆と力を合わせて生きていく

僕の心の灯台

東中学校　二年
五月女　友弥

朝起きると　一番にポストへ
新聞を取りにいく。
仏だんの掃除をすませ
その新聞を　仏だんに供える祖母。
新聞を読むのが大好きだった
亡くなった祖父の為にしている
祖母の日課だ。
その後　水やご飯などを仏だんに供え
お線香をたてると　手を合わせ
小さな声で　何かを話している。

祖母にどんなことを話しているのかを聞くと
「お父さん　おはよう。
　これから孫達が学校へ行くよ。
　今日一日　皆を見守っていてね。」
などと　祖父に毎日話しかけているそうだ。

僕は　祖母の家に行くと
一番に仏だんへ向かう。
お鈴を鳴らし　家じゅうに響きわたる
キレイな音色と共に　手を合わせ
心の中で祖父に話しかける。

祖父は　ぼくが生まれる前に
亡くなってしまった。
一度も会ったことはないけれど　なぜだか
祖父に　見守られて一日を
過ごさせてもらっているような気がする。
それは　海の安全を見守る灯台のように
僕の心を　優しく包んでくれている。
「おじいちゃん、いつも見守ってくれて
　ありがとう。
今日も一日　元気に頑張るね。」

緑の海をかけて行く

西中学校　一年
下西　秀和

青く　すんだ空気
見わたすかぎりの田んぼ
まるで緑の海の中を
自転車で思いっきり
かけぬけて行く

向かうのは、遊ぶ約束をした
利根川の土手の近くの友達の家
今日は何をしようかな
なんて考えながら
ワクワクしながら
かけぬけて行く

土手から見える遠くの景色
用水での魚つり
あっという間に時間が流れる
友達の声　笑い声

いつの間にか帰りの時間
楽しかったね　明日もまた遊ぼうといい合う

カラスが鳴いている
夕焼けに
まっ赤に染まった緑の海
あぁ楽しかった
そう思いながら　帰る
次は何して遊ぼうかな
そんな事を考えながら
自転車をこぐ
明日もまた緑の海をかけて行く

「夏の戦い」

東中学校　一年
下山　美咲

用水路に
赤いはさみを持った
あいつは
今年もひそかに
生きている
でも
私は見のがさない
大きなあみを
片手に
私とあいつの
バトルが始まる
静かに
あいつの近くに
しのびよる
ザッザッ！
おっとれたか？
あみの中を
のぞいてみると
おこった顔をした
あいつがいた
やっとつかまえた
勝者は私だ！
あいつはいかくして
はさみをふりまわす
でも
そんなことをしても
全然こわくない
「よろしくねザリちゃん」

小さな夏の神様

西中学校　三年
須永　陸杜

僕の家に来る小さいヤツ
それは、夏にしかこない
窓に、あみ戸にくっついていて
とても、すばしっこい
それは、小さなヤモリ
夜にしか来ない
だけど、雨の日でも来る
風の強い日も来る
夜には、必ず来る。
それは、小さい体をしている
雨が降っていても、
風が強くふいていても、
必ず来る姿は、勇気をもらう
何時ぐらいに来るかは、わからない
だけど、それが少しの楽しみ
いやなことがあっても
つらいことがあっても
それは、いるだけだけど、
窓や、あみ戸にくっついているだけだけど
見ると、少し心が安らぐ
勇気がわく、見ると心がやすらぐ、
そして、楽しみもくれる
それは、小さな夏の神様だ

ふるさとと共に

東中学校　三年
福島　ひなき

目を閉じれば
時はさらさらとページをめくるように
静かに流れてくる

今まで過ごしてきた場所、時間、思い出
学び、遊び、己を成長させた教室
音楽と愛を奏で友と創っていった部活
笑顔の絶えない愛で溢れた家族との時間

目を開ければ
私は中三の受験生

たとえ嵐の中へでも
どれだけ大きな試練が待っていても
大切なふるさと達を引き連れて
一歩一歩前へ進んでいく